

No. 173

<https://nitten.or.jp/>

令和元年9月26日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

## 改組 新 第6回日展に向けて



鍍金梅花印櫃（梅花図鍍金印櫃） 清水亀藏（南山）

## 「改組 新第六回日展を開催するにあたつて」

日展理事長 奥田小由女



公益社団法人日展は、令和元年、改組新第六回日展を開催いたします。節目となる第五回展は平成最後の展覧会となり、本年、新しい令和の時代を迎えての日展開催は、何か明るい兆しを感じ、今日迄課題の多かった日展も令和と共に新生日展の気持ちで、夢を持ち発展、進化してゆき度いと望んでおります。

また来年二〇二〇年はオリンピック・パラリンピックの年であり、日本の文化を紹介する「日本博」も開かれ、日本の文化芸術を世界に発信する機会も訪

れます。日展は常に高い次元を目指す五科ある作家集団として、より優れた日本の美を国内だけでなく、海外へも発表してゆく視点で取り組んで参ります。

本年の日展の会期は、十一月一日から二十四日までとなります。内容の濃い日展として、新たな時代に全力で努力してその成果をご御覧頂きます。

この夏の猛暑は厳しく制作も大変でしたが、皆様、健康にご留意され御活躍をお祈り申し上げます。

# 改組新 第六回日本美術展覧会実施内容

改組新 第六回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ  
例年、日展会期中に開催し、ご好評をいただいております、講演会・シンポジウム・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

(入場無料 於国立新美術館 三階 講堂) ※変更となる場合があります。

会期 令和元年11月1日(金)～令和元年11月24日(日)  
観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)  
休館日 毎週火曜日

入場料 (税込)  
○当日券  
○団体券・前売券  
会場 国立新美術館 東京都港区六本木七一二二一二

※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。  
小・中学生は無料。

○会期の後半はかなりの混雑が予想されますので、なるべく会期の前半に  
ご入場下さい。  
11月15日(金)は「日展の日」、入場無料になります。

**日展**

新しい時代 日本の美

改組新 第6回 日本美術展覧会

日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書

2019年  
11月1日(金)～24日(日) 火曜日休館 国立新美術館

◆主催: 公益社団法人日展 ◆後援: 文化庁/東京都  
◆観覧時間: 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで) ◆11月15日(金)は「日展の日」入場無料  
◆入場料: 一般 1,300円(1,000円)/高・大学生 800円(600円) ◆内閣官房20歳以上登録料、消費税、料金中止料金料、入会料、会員登録料にかかる料金を含みます。  
※チケットセイバーカード・セイバーカード・セイバーカードは日展ウェブサイト: <https://mittent.or.jp/> でご購入下さい。

The Japan Fine Arts Exhibition

月	日	講堂でのイベント
11月2日(土)		午後1時30分～3時30分(日本画) ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者(大臣賞・都知事賞・会員賞・特選)
11月2日(土)		今年度審査員と新入選者による座談会 今年度審査員 今年度新入選者
11月4日(月・振休)		午後1時30分～3時30分(洋画) ※途中10分休憩 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月8日(金)		午後1時00分～2時30分 特別講演会「美の心 茶の心」 茶道裏千家 十五代・前家元 千 玄室氏(大宗匠) ※整理券を配布します
11月9日(土)		午後1時30分～3時30分(彫刻) ※途中10分休憩 シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」 工藤 潔・早川高師・岡本和弘・安田陽子 境野里香・加山総子
11月16日(土)		映像による作品解説「彫刻」 竹谷邦夫・徳安和博・阿部鉄太郎
11月23日(土・祝)		午後1時30分～3時30分(工芸美術) ※途中10分休憩 今年度審査員と受賞者による座談会 (進行) 士橋靖子 西村東軒・佐々木宏遠・吉川美恵子・和中簡堂 映像による作品解説「書」 吉澤鐵之・田頭一舟・岡野楠亭

## 「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品(彫刻一部の作品)に触れて鑑賞していくだけの取り組みを始めました。





日展に寄せる

錢 谷 真 美

夏の暑さが去り涼しさの感じられる秋は、実りの秋、食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋など様々な称さますが、何と言っても最も人口に膚感しているのは、「芸術の秋」ではないでしょうか。この時期、全国各地で様々な展覧会や音楽会が開催され、学校でも文化祭、学芸会など子どもたちの発表会がしきりと催されます。こうした芸術の秋を代表する国民的展覧会が「日展」です。

日展は、一九〇七年（明治四〇年）開催の公募展、文部省美術展覧会（文展）がそのはじまりであります。以来、一一〇年以上の歴史を経て今日に至っています。この間、主催組織の変更や表彰・審査方法の改善などを重ね、名称も「文展」「帝展」「新文展」と改められ、現在の「日展」へと発展してきました。



特別展「顔真卿」（東京国立博物館・平成館 展示風景）

今日、日展は、毎年一万一、〇〇〇人を数える応募者があり、入選者の作品に会員や無鑑査の作品などを合わせた約三、〇〇〇点の作品が国立新美術館に展示されます。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門という幅広い分野を対象にした国内最大規模の公募展と言えると思います。

一方で、日展が国民的展覧会として存立している背景のひとつは、長きにわたる日展全体の雰囲気や日展に集う作家の作風が広く国民に愛されてきたという側面もあります。勿論、個性豊かな作家の方々が集まるわけですが、印象論的に言えば美しいものを美しいと思いい、美しく表現する、誰もが安心してその美の世界に浸ることができるわかりやすさ、そういった世界を日展は築いてきたようにも思えます。

私は、いくつかの子どもたちの作文や絵画、工作的のコンクールに関わっています。子どもたちの作品に接すると、本当に子どもたちの鋭い感性、豊かな想像力、強い好奇心、あくなき探求心、そしてたぐいまれなるユーモアやヒューリ

日展は、数年前、審査をめぐり厳しい批判を受けました。以来、日展は、情実を排し、厳正かつ公平な審査の実現を期し、外部からの審査員の導入を図るなどの改革に取り組んでこられました。展覧会の名称自体も「改組新日展」と改めています。

スポーツや囲碁将棋などは勝敗・優劣が明らかです。フィギュアスケートや体操など審判の判定を要する種目でも採点基準は比較的客観的に定められています。しかし、絵画や工芸、書といった芸術の世界の審査はなかなか難しい面があると思います。

美的なセンス、技の練達、熟度、アイディアの斬新さ、よき伝統の体現、具象と抽象等々、素人の私が思いつくままあげても様々な観点があるように思います。審査に当たる人は、それが、芸術に対する主観や好みを持っていました。その中で厳正公平な審査を行ふ訳ですから、審査員の皆様のご苦労はいかばかりかと拝察します。

私は最近、先生に付いて書を学びはじめました。六〇の手習いで、書写の段階ですが、とにかく丁寧に書くことを心がけています。日展で一番応募が多いのは書の部門とも聞きます。今年、日展ではどのような展示がされるのか、今から楽しみにしています。

日展は改革を重ねながら今日の姿に至りました。日展はこれからも日本人の美・そこに心の安らぎを覚える日本の美を求めて歩んで行かれるものと思っています。

錢谷真美（せにや まさみ）



一九四九年秋田県

生まれ

東北大学教育学部

卒業

文部省入省、大臣

官房審議官、内閣

審議官、文化庁次

長、文部科学省生涯学習政策局長、初等教育局長を経て文部科学事務次官

現在、東京国立博物館館長、公益財団法人日本博物館協会会長

河野元昭

私は日本近世美術史の研究に携わり、現在は静嘉堂文庫美術館館長として「饒舌館長」なるブログも書いているが、日展との関係が皆無というわけではない。というよりも、日展は私がこの道に進んだ切掛けだといつてもよいであろう。私の親爺は町医者をやつていて、美術が大好きであったが、美術展といえば日展であり、秋になると私を連れて行つてくれた。それは親しかつた島田利一先生が日展に出品されていたからである。

絵が大好きであった私も、小学生のころから先生に習つていた。高校時代まで油絵を描いていた私も、結局創作をあきらめ美術史という人文科学に進むことになるのだが、これも島田先生によるかつてのご指導があつたからにほかなりない。島田先生は風景画から仏像に画域を広げ、日展の会員として活躍を続けられた。ずっと私も年賀状の交換をさせていたが、去年九十六歳で亡くなられたことは悲しく寂しい。

また親爺は日本山岳会に所属し、低山登山家をもつて任じていたが、山岳画家として有名であつた足立真一郎先生が日展に出品されていたことも、親爺を日展へ惹きつけた理由だつたらしい。

日展の書科を牽引された青山杉雨先生も忘れることができない。もちろん、先生がお元気なところからご著書を拝読していたが、お会いする機会はなかつた。ところが先生が亡くなつて五年ほど経つた平成十年、学術論文賞「青山杉雨記念賞」が創設され、審査委員になつてほしい

旨の委嘱を受けたのである。書にこそ日本美術の特質が最もよく現れていると思考する私は、編集委員をつとめている美術雑誌『國華』にも、もつと積極的に書を取り上げるべきだと主張していたが、書論など発表したこともなく戸惑つた。

しかしこれは、書を勉強するにまたとない好機だと思い、お引き受けすることにした。審査委員をつとめた五年間、選考論文を査読し、また専門分野を異にする研究者と議論するなかで、私の書に対する考えは確信に変つた。これを含めて、私は楽しかった想い出を『書道美術新聞』に寄稿したのだった。

杉雨先生のお弟子さんに、現在日展で活躍する高木聖雨先生がいらっしゃる。去年、静嘉堂文庫美術館では特別展「あこがれの明清絵画」を開催したが、聖雨先生には対談をお願いした。

相方は東京国立博物館の富田淳先生、タイトルは「明末清初の書——連綿趣味の魅力を語る」である。明末清初の六大家を中心には、聖雨先生は書家の立場から、富田先生は研究者の観点から丁々発止と議論は盛り上がり、また愉快なエピソードなども披露されて、とても興味深く実り多い対談となつた。

ところで明治四十一年、『國華』二二二三号と二二四号にわたり、浜田青陵が「文部省と玉成会の両美術展覧会」という記事を書いている。のちに考古学者として名を挙げる青陵は弱冠二十七歳、『國華』の編集を手伝いながら記事を書いていた。当時、日本画では天心を会頭に仰ぐ新派系の国画玉成会と、旧派とみなされた日本美術協会系の正派同志会が覇を競つていた。我が国初の官制美術展である文部省美術展覧会、通称文展の第二回展では、第一回展とは

反対に国画玉成会が出品を拒否して、単独の展覧会を開催した。青陵はこの問題を取り上げて論じ、「吾人は洵に其の事態の変化の早きに驚き、又た美術界の紛擾の太しきに呆然たらざるを得ず」と書いたのである。

現在の日展は、この文展以来の伝統を担いつつ、公益社団法人日展により運営されている。官制から民間公募制に発展的移行を果し、みずから困難な問題にも敢然と立ち向かつて、青陵が嘆いたような紛擾もなく、一糸乱れぬ協力体制のもと、更なる飛躍発展の時を迎える。誠に慶賀すべきことである。しかし、紛擾も逆からいえば確たる美的主張から生まれるものであつて、日展にも少しこれがあつて悪いわけではないが、それは「亂を得て蜀を望む」というものであろう。

河野元昭（こうの もとあき）



一九四三年秋田

県生まれ  
東京大学卒業

東京国立文化財  
研究所文部技官

東京大学教授、  
東京大学大学院

教授を経て、秋田県立近代美術館館長、京都美術工芸大学学長

美術雑誌『國華』前主幹  
現在、静嘉堂文庫美術館館長、秋田県立近代美術館名譽館長、東京大学名譽教授

出合える新しい世界

岸野圭作 (第一科 会員・審査員)

今、安曇野に起居し、日々窓外に移り行く四季の様を眺めています。

冬には白く雪を頂き凜とした山々を、春には流れる川の堤に連なる満開の桜。夏の空、夜の星、虫の音。秋、黄金色に染まる田園とそれを取り巻くよう広がる紅葉。それぞれに目を奪われ胸が騒ぎ写生に出かけ、日頃通り慣れた道を行くとき、また違った世界が見えてきます。葉を落とした木立の間に、初めて認める何の

変哲もない民家の豊かな佇まい。新緑の大木の下に咲き乱れる小さな花。畦道に混然と生い繁る草々。側溝の片隅にひつそりと色付く雑草の息吹などに、心が癒される思いがします。私の住む小さな場所は未だ見ぬもの、触れたことのないものに溢れています。今回の審査にあたり、また多くの新しい世界に出合えることと信じています。



本年外部審査員のお一人を除いた日本画審査員十六人の年齢を見て行くと、八十年代一人、七十年代二人、六十代五人、五十代四人、四十代四人。「十年ひと昔」と言われたことがあります。だが、少しずつ育った世代のズレがバランス良く構成されていると思います。目まぐるしく変化、多様化する美術界にあって、この世代のズレを持つ審査員は、それぞれの世代の美意識を大切に、前後の十年程には多少の理解もできそうで、各世代の代表として、各自の判断で公正に審査される時、新進気鋭の限られた世代が下す他のコンクールでの評価と違つたとしても、大切に守つて良い評価に思います。

最近耳に残つたフランスの詩人ポール・ヴァレリーの言葉に「湖に浮かべたボートを漕ぐように、人は後ろ向きに未来に入つてゆく」の私流の解釈ですが、やみくもに新しいことに向かうのではなく、過去の美意識、価値観を尊重しつつ、幅のある世代の下す様々な美意識のすり合わせによる公正な審査を大切にしたい。

このたび初めて審査員を務めさせていただきます。大学卒業後、故郷で働きながら制作をしていましたが、遠方からひとり出品する事は決して楽な事ではありませんでした。けれども自分が今何を見て何処に在るのかを実感するための切実な手段だったように思います。そうした作品を受け入れていただき、多くの方に見ていただけた事は、かけがえのない経験であり、生きていく力にもなりました。

一方で、美術館や大学に勤務しながら作る側と観る側を往来する日々の中で、作品の何が人の心を揺さぶるのか、私は折に触れて考えきました。それは答えの出ないことかもしれません、一枚の作品がひとりの人間の軌跡であるという実感は、自分が年齢を重ねるにつれて大きくなり、現在に繋がっています。

未熟ではありますが、平靜に感覚を研ぎ澄まし、ひとつ一つの作品と真摯に向き合うようこの度の審査に努めてしまひました。



寺久保文宣（第一科 会員・審査員）



公募団体展の本義は「審査と展示」にあると思いません。これはその団体が如何なる美を価値とするかの表現です。現代は価値多様並列化の時代であり、特に洋画の世界ではアートの分野を含めますと様々な表現に価値があり、このことはある場所では価値があつても別の場所においては価値が無い、あるいはマイナス価値ということもあります。こうした現代において、日展は如何なる美を価値とするのかという理念と感性の方針の鮮明化が求められているのではないかと思います。「審査と展示」を為す事、それを私は個人的に「美のジャッジ」と呼んでいます。

六年前には発足された日展改革検討委員会委員に任じられ、改組新第一回の審査員もさせて頂きましたが、当時十五万人強あつた入場者も昨年十万人強、五万人減の三分の二となつてしまひました。日展は一二年の歴史となりますが、歴史を総合視しながら明治四十年の文展創設時まで遡つて先達の志とその消息を省み考へ、毅然とした価値の再建を行う時期かと思われる、今日この頃です。

佐藤祐治（第一科 会員・審査員）

大竹正治（第一科 準会員・審査員）

作品の搬入が近づいてきました。

さて、ここで出品される皆さんにあえて問い合わせがあります。

今、描き込んだ一本の木を十センチ横に移すことはできますか。

特に日展に出品される方は、それぞれ独自の表現方法を深め描いていることでしょう。しかし、完成に近づいてくるにつれて、最初に意図した構想とは開きが出てくることがあります。もし、木の位置が邪魔しているのなら、躊躇なくそこに手を入れて欲しいと思います。すでに描きこんだ後だけに、時間も勇気もいる作業です。しかし、ここで目をつぶつて出品し、思つた結果にならなかつたら後悔しませんか。展示されたとしても、満足のいく作品として見ることができますか。

全力を尽くした一枚一枚の作品を前に、私たちも、全力を尽くして審査に臨みます。それぞれの持ち味を十二分に出し切った作品に出合えることを楽しみにしています。



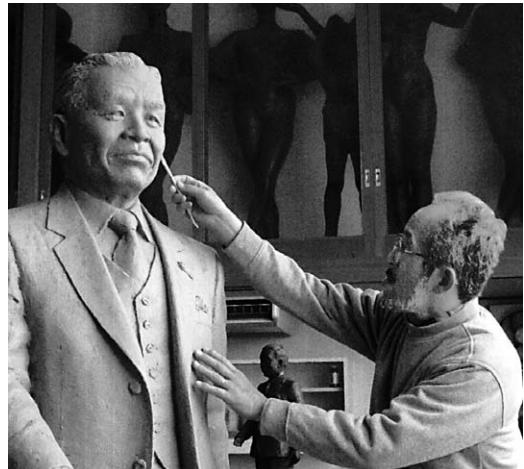
若い頃の日展の印象は、上野の旧東京都美術館の頃に遡ります。あの正面玄関の石段のところの日展の文字が印象的で、学校の帰り道、横目で見ながら通り過ぎていきました。間もなく新館が出来て、旧館が取り壊されるのを少し寂しい思いで眺めしていました。

それから縁あつて日展に出品、そして、入選叶つて自分の作品が展示された時、あの先生と同じ会場に展示されているのだなと、心ときめいたことを思い出します。月日の流れの速さを感じます。

今、国立新美術館で審査のお仕事に就かせていただく事となり、緊張と不安、期待が入り混じつた不思議な感覚であります。自分の与えられた仕事を精一杯全うしたいと思います。以前病気をした時に、人生は限りがあり、時間の大切さを痛感しました。今出来ることから始めていきたいと思います。この貴重な機会を与えたことに感謝いたします。ありがとうございます。

## 思うこと

嶋畑 貢（第三科 会員・審査員）



彫刻。ここには高さがあり、奥行きがある。平面では味わうことのできない面白さが広がる。私は常常々、人間をモチーフに制作を続けてきた。人物をモデルにすることで心に繋がりが生まれる。モデルと私。作品とそれを見て下さる方。鑑賞して下さる方々と私の間にも心の触れ合いが生まれる。自然な心に逆らわず、今ここに生かされている自分に喜びを感じ、生涯を彫刻と共に過ごせるならば何と幸せであろうか。

さて、この度の日展の審査員にあたり、ある彫刻家のこんなことばを思い出す。「感じますか。伝わりますか。外見のきれいなだけのものはいやです。人の真似をしたものはいりません。下手でも心に響くものがあれば…今あなたの思ひが知りたいのです。今の自分に満足せず、少しでも新しい自分を見つけたいと思っていますか。沢山の作品の中で、あなたの感性の光る作品を見たいのです。」…と。正に、今の私の心境です。

## 流転

槇野仁一（第三科 会員・審査員）

日展は、一世紀以上もの長きにわたり、その礎を築いてこられた先人との関わりが延々と受け継がれ、発展してきた作家集団であると考えています。その日展の場に四十年近く作品を出品し続けさせていただけに今更ながら畏敬の念を新たにしています。また今回、審査員の重責を担うことになり、あらためて自分の制作姿勢に襟を正す思いです。

これまで多くの自然灾害を目にしてきたとき、人は常に自然界に生かされているという謙虚さを強いられた思いです。しかし穏やかな様々に変化する自然界から受ける刺激や感動がなければ作品は生まれてこなかつたことも確かです。

応募されてくる作品は、皆練達した高度な技の基、それぞれの作者の内面から湧き出た思いを形にしたものであろうと思われます。様々な苦労や思いが込められた全ての作品に真摯に向き合い、厳正かつ公平な審査を心掛けていたいと思います。



## 伝統に根ざす表現の芽吹き

宮坂慎司（第三科 準会員・審査員）



令和となつて迎える初めての日展。時代の変革期を実感させる今回の展覧会で審査員の任にあたることは、光榮であると同時に重い責任を感じます。

当代にあつて、新たな個の表現を模索することは作家の自然な姿といえるでしょう。しかし、特に彫刻においては物理的に、時にはそれを超えて「かたちが立つ」ための「根」が重要だと考えます。人が立つ姿はそれだけで美しく、さらには、確かな造形原理と思想に裏付けされたたちは、ある種の存在感を纏い主張するものです。

一一〇年を超える日展は、この国の芸術文化に深く根を下ろしてきました。同時に、個としての我々もまた昭和、平成と時代を越えて表現の根を張つてきたといえます。自己内省の言葉に他なりませんが、移る今にあつて根ざしを感じさせる、搖るぎない作品が並ぶ会場を期待します。その上で、新たな個の表現の芽吹きを見逃さぬよう、それぞれの作品と真摯に向き合い、努めて審査に臨む所存です。

志観寺範従（第四科 会員・審査員）

望むこと

中村武郎（第四科 会員・審査員）

今、思うこと。

浅井啓介（第四科 準会員・審査員）

令和元年の記念すべき年に改組新第六回日展の審査員に委嘱され責任の重さを感じると共に気持ちの引き締まる思いです。日展に出品して五十数年、これも先輩方のご指導のお陰と感謝いたしております。

最近は漆芸の奥深さを痛感すると共に素材そのものの質感を活かした作品作りを追究しています。漆の持つ黒色や螺鈿、金銀の重厚な輝きを長年のモチーフである昆虫の世界に用いることにより自然の摺理をより神秘で幻想的に魅せたいと思っています。

工芸は平面、立体、素材も技術も多岐にわたりますが作品の良いところを見つけ真摯に取り

くみたいと思思います。

個性

的で自

分に無

い感性

的作品

に出来

る事

を期待

する共

に自

分もよ

り一層

精進し

てまい

ります。

この度、審査員を拝命し、その責任を痛感しております。工芸美術は、素材が多岐にわたり、それぞれの技法を十分に理解した上で、審査にあたることとは到底困難なことです。そこで、高度な技法も手段であって、作品の良し悪し、感動を呼ぶことは別とする考えに基づき、まず、すべての素材に共通するポイントに着目します。作者の意図が明快に伝わるか。素材を活かしたこととは別とする考えに基づき、まず、すべての素材に共通するポイントに着目します。今年は令和元年という新しい時代の年であります。新たな工芸美術作品への挑戦や、類型など多くの意欲的な作品のない作品が出品されることを期待しております。

私は自身も今回の初審に戻り、創

造的な工芸

美術作品を

制作し、

日々精進し

ていきたい

と改めて思

います。



浅井啓介（第四科 準会員・審査員）

日展を前にして

志観寺範従（第四科 会員・審査員）

望むこと

中村武郎（第四科 会員・審査員）

今、思うこと。

浅井啓介（第四科 準会員・審査員）

この度、改組新第六回日展にて初めての審査員に選出されました。

これまで審査を受ける側であつた自分が、審査をする側になるということで、誠に気の引き締まる思いでいっぱいです。

工芸美術は様々な素材・技法があり、多岐にわたります。素材・技法と表現の一致。その素材の質感や特徴などを充分に熟知し、美的な手法を用いての美術表現を試みていく世界であります。

今年は令和元年という新しい時代の年であります。新たな工芸美術作品への挑戦や、類型など多くの意欲的な作品のない作品が出品されることを期待しております。

私は自身も今回の初審に戻り、創

造的な工芸

美術作品を

制作し、

日々精進し

ていきたい

と改めて思

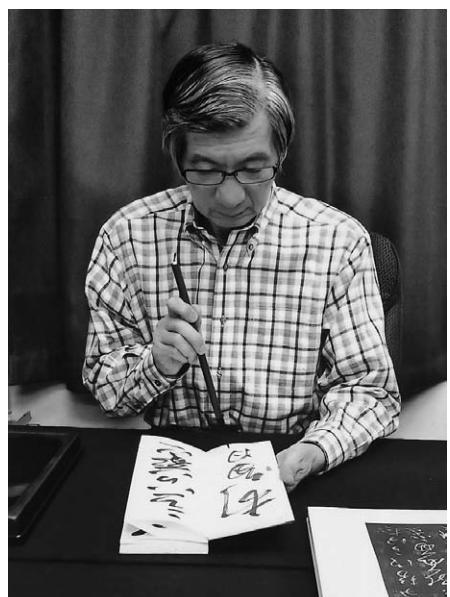
います。

私の審査は、一点一点の作品と丁寧に向き合

い、対話を求めることから始まります。

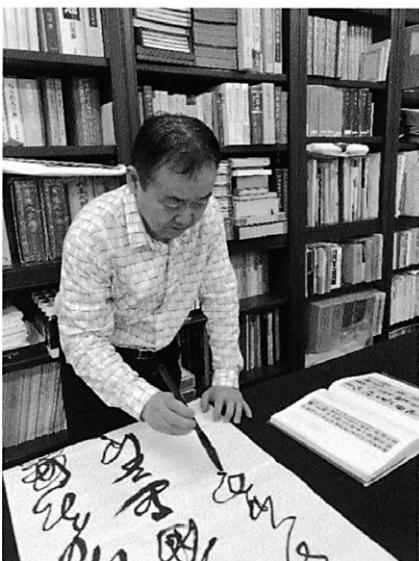
## 角元正燐

(第五科 会員・審査員)



## 福光幽石

(第五科 会員・審査員)



## 野田正行

(第五科 準会員・審査員)



このたび日展五科の審査員の報酬をいただき身に余る光栄と感謝を感じますとともに、その職責の重さに身の引き締まる思いです。

大学を卒業しました年、日展に初出品いたしました。

次の年、自分に足りないところを反省し、出品するも連続落選。制作にかける期間・時間を費やすも、また落選。「休むことなく出品し続け、ましては、練習量で補うしかないと考え、鍛錬を重ねた結果、思いもよらず五十八歳で一回目の特選、六十歳で二回目の特選を受賞させていただきました。

先輩の先生方より審査の大変さは伺つておますが、審査する側の責務は重大であり、その見識が厳しく問われることにもなります。応募作品一点一点、公平・厳正を宗に、自身の姿勢を正し審査に臨みたいと思います。

この度、審査員に任命され、重責を感じると共に、身が引き締まる思いです。

書は四千年的歴史と伝統があり、甲骨文字から楷書まで、それぞれに書体特有の性質・規範・様式をもちます。それを学び知ることで、はじめて書格の高い書を選ぶことができると私は確信しております。飽きのこない書には職人的技術・デッサン力が必要です。それは、時代に淘汰されることなく残つた古典の臨書から得ることができます。しかし、書いた人が見えてこない技巧主義の俗書は芸術とは言えません。また、造形美からかけ離れた直観主義的・独善的な書を選ぶこともできません。一見、粗野に見えてもいい書も存在します。俗書と区分することは容易なことではありません。

日展の使命は人材の発見と育成と思つています。知的で意志的な書を書くために、真摯な態度で古典を学ぶ努力ができる才能を持った人材を、一人でも発見できたらと楽しみに思つています。

このたび、日展二度目の審査員を拝命し身の引き締まる日々を送っています。

改めて、昭和四十四（一九六九）年の改組第一回日展からの図録で作品を通観しました。すると、この半世紀にわたる書の足跡があり、日本の「書」の表現は、昭和から平成にわたつて多様に変遷しつつ、確実にその足跡を残してきましたことがよくわかりました。同時に、「日展の書」が、日本の「書」の潮流をかたちづくり、牽引してきたということを痛感しました。

令和の「書」のあり様、方向性も、日展で発表される書作品の数々が決めていくと思うと、責任の重さを痛感する次第です。文明は進歩するが、文化は進歩ではなく時代とともに変遷するといえます。「書」の変遷はこれからも続きますようが、古典に裏付けされた「不变の書美」を継承していく、こうした観点を心に置き、公正公平に優れた作品を選び出す、そうした重責を担う審査員としてその任を全うしたいと思つています。

このたび日展五科の審査員の報酬をいただき身に余る光栄と感謝を感じますとともに、その職責の重さに身の引き締まる思いです。

大学を卒業しました年、日展に初出品いたしました。

次回の年、自分に足りないところを反省し、出品するも連続落選。制作にかける期間・時間を費やすも、また落選。「休むことなく出品し続け、ましては、練習量で補うしかないと考え、鍛錬を重ねた結果、思いもよらず五十八歳で一回目の特選、六十歳で二回目の特選を受賞させていただきました。

先輩の先生方より審査の大変さは伺つておますが、審査する側の責務は重大であり、その見識が厳しく問われることにもなります。応募作品一点一点、公平・厳正を宗に、自身の姿勢を正し審査に臨みたいと思います。

♪夏休み一日ART体験♪

第15回 **One day Art** ポート

今年も連日の猛暑の中、日展会場のイベントスペースで、「第15回 One day Art」が開催されました。

今回は、大人と子供、あわせて243名の参加者。パブリックスペースや国立新美術館の日展会場での展示も予定される共同制作は、各部門の特徴が出た仕上がりとなりました。

8月17日に開会した作品展は、

5日間で378名の方に鑑賞していただきました。

☆今回制作した作品は、日展のホームページ(こども日展ページ)でもご紹介します。

《指導作家》

7月26日 洋画

田辺知治 大友義博 桑原富一

佐藤祐治 佐藤龍人 星川登美子

中島健太 茅野吉孝

林 香君 南雲達也

村田真樹 高橋和則

(サポート) 井上英基 水谷俊雄

安藤タツ子 石原真理

相武常雄 平林芳子

(サポート) 鈴木葉子 月岡裕二

運営

7月27日 工芸美術(陶)

田辺知治 大友義博 桑原富一

佐藤祐治 佐藤龍人 星川登美子

中島健太 茅野吉孝

林 香君 南雲達也

村田真樹 高橋和則

(サポート) 井上英基 水谷俊雄

安藤タツ子 石原真理

相武常雄 平林芳子

運営

《ご協力いただきました》

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株

式会社玉蘭堂、

株式会社呉竹、

ス、株式会社光

雲堂、ターナー

色彩株式会社、

株式会社東海丸

二陶芸、株式会

社平助筆復古

堂、株式会社墨

8月5日 書

井上清雅 師田久子 綿引滔天

高木聖雨 高木厚人 永守蒼穹

(サポート) 尾花太虛 角田大壌 加藤文菜

斎藤真澄 永田瞬 滑田耀齋

萩原寛大 松浦龍坡 伊能柳華

市川奈々 安島可奈子

8月4日 彫刻

石黒光二 中原篤徳 野原昌代

(サポート) 堀内秀雄 山崎茂樹

原田治展 中村優子

堀尾秀樹 吉岡徹

廣川政和 鈴木紹陶武 加山総子

(オブザーバー) 山田朝彦

8月3日 日本画

亀山祐介 川田恭子 能島浜江

岩田壯平 米谷清和

(サポート) 野田夕希 安田敦夫

石黒光二 中原篤徳 野原昌代

堀内秀雄 山崎茂樹

原田治展 中村優子

堀尾秀樹 吉岡徹

廣川政和 鈴木紹陶武 加山総子

(オブザーバー) 山田朝彦

賛助会員制度 《日展パートナーズ》

(掲載希望者のみ 令和元年8月31日現在)

法人・団体

株式会社 一休園

株式会社 インフォメーション・ディベロブメント

株式会社 永善堂

株式会社 大垣共立銀行

株式会社 加賀屋

株式会社 玉蘭堂

株式会社 光雲堂

株式会社 近藤紡績所

株式会社 佐久間太熙堂

株式会社 三洋

株式会社 黒田浩平

株式会社 栗原直子

株式会社 杭迫喜久子

株式会社 佐坂本浩一

株式会社 梶原梅

株式会社 飯田真未

株式会社 稲塚勝己

株式会社 今田功和

株式会社 稲坂勝己

株式会社 飯田真未

株式会社 東晋一郎

株式会社 井上道

株式会社 石崎國子

株式会社 岩村朝子

株式会社 大谷真未

株式会社 飯田真未

株式会社 奥田節子

株式会社 奥田節子

株式会社 金子美

株式会社 木下碩和

株式会社 奥田節子

株式

# 作家人生——私の仕事——



伊勢神宮 五十鈴川にて（平成10年）



『アンツワネット』（平成二十九年改組新第四回日展出品作）



『ながい夜』  
（平成十一年第三十一回日展出品作）  
文部大臣賞



『T子』  
（昭和四十七年第七回日春展出品作）  
奨励賞



## 人生の選択肢

第一科日本画 理事 福田千恵

大学三年の六月十七日、一生の師と仰ぐ佐藤太清先生の門下に入り、昭和四十四年、武藏野美術大学卒業と共に公募展の日展出品することとなりました。

当時は大学を卒業するまで公募展に出品できない時代でした。大きなパネルを見た瞬間、とにかくビックリし、私には何もかも驚くことばかりで。

そんな姿を見ていてくれた姉は、いつも制作中に夜食を作り励ました。

大学四年間制作したはずが、ただ道を知ることと実際にその道を行くこととではこんなにも違うと改めて感じた年でしたが、初出品が初入選という思つてもみない結果を頂き、感激と共に雲の上に乗った心地でした。

お祝いにと、父、姉と私の三人でアジア旅行に出かけることとなりました。最後の国、フイリピンにつけたその日から、日展入選の快挙から、一転、大好きな姉を失うという真逆の状態になりました。その姉からの言葉が今も忘れられなくなりました。

「あの時入選していなかつたら」と悔やみ、自責の念でそれからずつと献花の気持ちで制作する日々となり、絵を描くときは幸せな気持ちになれず、胸が締め付けられそうで、昼食後は吐いて描けずになりました。

重鎮の先生より「死人を描いているのか」と。

また、そんな折、父より、「三十五歳までに賞を取れなければやめるように」とも言われました。

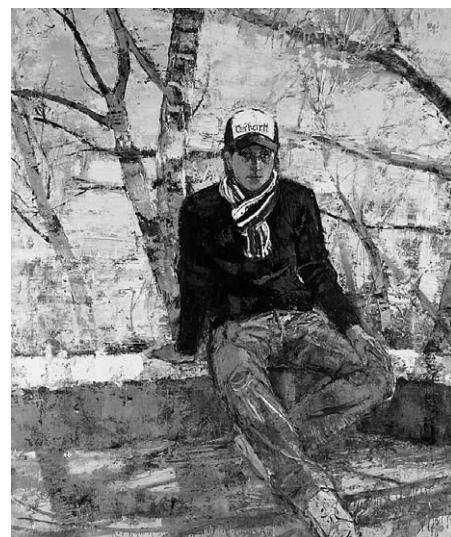
父には、そんな簡単な世界でなく、甘いものではないと反抗しておりましたが、ラストチャンスの年に特選を頂けて、今はこの道にどっぷりと漬かっております。

人生には色々な節目が訪れ、その都度自分らしく選択するわけですが、色々な切掛けで選んだ道です。最後まで一枚の絵を求めて貫きたいと思います。

まだまだこの道でどこへ行きどこに辿り着くか判りませんが制作してまいります。



《冬の陽》(平成29年改組 新 第4回日展出品作)



《荒波》(平成30年) 四曲一隻



### 自然に学ぶ

第二科洋画 理事 佐藤 哲

私は絵を描き始めた時、対象をただ写して再現すれば良いと思つていた。だから物を明暗でしか見なかつた。私の師匠江藤哲はこの間違いを自分の後ろ姿でわからせようとした。しかし、若い時の私はその意味がわからぬまま教えに従つていた。師匠が亡くなられた時、すべて自分の頭で考えなくてはならない時が来たのである。そこで初めて「物を見る」ことの本当の意味や「人の心理をふまえた絵の理屈」の大切さを感じたのである。

「自然から学ぶ」とは昔からよく言われた言葉だが、この意味がようやくわかつてきた。

私は海を描く。海はいつもじつとしていないし、同じ形の波は滅多に来ない。だからこの風景を一時停止させる機器があつたらどんなに便利だろうと思つた事がある。ところが現在は大画面でそれができるようになつたから凄い。で、私はその画面を利用して描くのかというとそれを一度も使つた事が無いから不思議だ。相変わらず大変な思いをして現場に行つて描く。しかし、これが最もいい方法だと今になつてわかつてきた。自然是人に力以上の物を与えてくれる。現場には色や形、生の感動がそこにある。何故か写真や便利な機器にはそれが無いのだ。現場主義で陥り易いのは物にとらわれ過ぎて見たままに描いてしまうことだ。作品にするには目に見えない嘘が必要なのである。その嘘によってモチーフは活気づくし、感動を具現化できる。アトリエで実行しようとすると本当の嘘になつてしまつ。やはり現場には死ぬまで行くしかないと思つてゐる。風や太陽に触れながらいつまでも少年の様な心を失わない人間でありたいと願う。

改組新第5回日展巡回展

開催順	開催地	会期	会場	開催者	入場者数(人)
	東京	2018年11月2日～11月25日	国立新美術館	公益社団法人 日展	107,412
1	京都	12月15日～2019年1月12日	京都市美術館別館 みやこめっせ・日図デザイン博物館	日展京都展実行委員会	26,351
2	名古屋	2019年1月30日～2月17日	愛知県美術館ギャラリー	中日新聞社	48,524
3	富山	4月20日～5月6日	富山県民会館美術館	北日本新聞社	22,533
4	大阪	6月1日～6月30日	大阪市立美術館	日展大阪展実行委員会	39,994
5	岡山	7月6日～7月28日	岡山県立美術館 岡山県天神山文化プラザ	山陽新聞社	20,057

・期日名稱に変更する場合があります。

# 日展新会館

第31回 JGSボタニカルアート展  
9月26日(木)～9月28日(土)

日展会館

施設利用案内

日展会館の貸しスペースはギヤラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。料金等詳細はホームページをご覧ください。

※10月・11月は日展準備・開催期間のためご利用になれません。

※日展会館は令和2年4月1日以降の貸出を中止しております。

(施設利用に関する問い合わせ)

電話 03(3821)0453  
公益社団法人日展施設管理係

昭和六年東京都生まれ。昭和三十一年第十二回日展初入選、同四十年日展会員、同五十三年日展評議員、平成三年日展理事、同五年日展參事、同六年日展理事、日本芸術院会員、同七年日展常務理事、同二十三年日展顧問、同二十九年旭日中綬章受章、同年文化功労者。昭和四十年第八回日展審査員（以降合計十五回）。



（日本芸術院会員）

左の先生方が逝去されました。  
謹んで哀悼の意を表します。

Image: INM Image Archives

表紙

編集後記

令和になつて初めての日展を迎えようとしています。

今号において特別寄稿をいただいたお二人の先生から、日展に関するご意見やご教示を頂戴しました。さらに、日展理事の先生からも制作への取り組みや考え方について、原稿をお寄せ頂きました。

また、今年度の審査員のなかから新審査員を含め、各科三名ずつ、それぞれの制作への思いや審査員としての抱負などを語つて頂きま

創作活動を始めた頃のあの瑞々しい喜びをいつまでも忘れず、制作に励みたいものと常々思っています。出品者一人一人がこれから日の日展を支えて行く大きな原動力であることに相違ありません。

百十余年の歴史と伝統の力のうえに、革新的な要素を加え、新しい時代の日展に向つてさらに飛躍することを願っています。（平野）

編集委員	川田 桑原	恭子	水野	行雄	收
中村	相武 清家	富一	平野		
伸夫	常雄	悟	堤		
西村	月岡				
東軒	裕二	直美			